

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題		本年度学校経営の重点 (短期経営目標)	
1 探究的な学びを軸にした教育の充実 ・主体的に学ぶ力を育てる授業づくりを推進する。 2 ふるさとを生かした学びと地域との連携を強化する。 ・地域を学び、地域に関わり、地域に発信する力を育てる。 3 安心できる学級づくりと支援体制の充実 ・児童理解を深め、未然防止に取り組む。 4 教職員の協働と専門性の向上 ・共に学び合い高め合う職員集団をつくる。		○探究的な学びが広がり、児童の課題解決力や自己評価力が高まった。 ○非認知能力の育成を意識した授業づくりが進んだ。 ○児童理解と支援の体制が整い、安心して学べる環境が広がった。 ○異年齢交流や家庭との連携が児童の成長を後押しした。 △非認知能力の評価と成長の見える化が不十分。 △探究の進め方や支援方法に学年・教員間でばらつきがある。 △振り返りや目標設定の質を高めるための共通理解が必要。 △多様な児童への継続的な支援の在り方を見直す必要がある。		1 探究の視点をもった授業づくりの推進 ・子どもが問いをもち、自ら考え、学びをつなげる授業を工夫する。 2 ふるさとを題材にした実感ある学びの推進 ・地域を舞台に、自分ごととして学ぶ機会を充実させる。 3 未然防止の視点に立った学級づくりの推進 ・児童理解を土台に、安心して過ごせる環境を整える。 4 教員間の学び合いと連携の推進 ・校内研修や日常の実践交流を通して、実践力を高め合う。	
評価項目	重点目標	具体的方策	成果と課題 (自己評価)	学校関係者評価	
教育課程 学習指導	子どもが自ら問いをもち、仲間との対話や地域とのかかわりを通して学びを深め、自分の言葉で考えを発信し、未来を切り拓く力を育てる。	1 授業の導入で「問い」が生まれる工夫を取り入れる。 2 ペア・グループでの活動を毎時間どこかで位置づける。 3 地域の人や場所とつながる学習活動を年3回以上計画する。 4 自分の考えを伝える場面を設定する。 5 単元末に「わかったこと・深まったこと・疑問に思うこと」等を整理させる。	○授業導入で問いを設定する工夫により、受け身で聞く姿勢から、自分の考えをもとうとする姿への変容が見られた。 ○ペア・グループ活動を継続的に位置付けたことで、考えを言葉にしたり、他者の考えを聞いたりする姿が増えた。 ○自分の考えを伝える場面を設定することで、発言への抵抗感が薄れ、自分なりに表現しようとする児童が増えた。 ○単元末の振り返りで、「分かったこと」に加え、「考え方」や「学びの過程」に触れる記述が増えてきている。 ○地域とつながる学習を通して、学習内容を生活や地域と結び付けて捉えようとする姿が見られた。 △学び方を振り返り、次に生かす力(自己調整力)は、学年や個人差が大きく、十分に定着していない。 △問いや対話は生まれているが、思考を深める段階まで至らない場面がある。 △振り返りが事実確認にとどまり、次の学習への見直しにつながっていない場合がある。	・行事を参観する中で、子どもたちが自分の考えを伝えたり発表したりする姿が見られる。 ・異年齢の集団活動の様子から、友達の考えを聞いたり、自分の意見を伝えたりする力が育っているように感じる。 ・地域の方や身近な場所とつながる学習活動があり、学校での学びが地域と結び付いていることが分かる。 ・タブレット活用が進む中でも、鉛筆で書くことや自分の考えを整理して書くことを大切にほしい。 ・学年や子どもによって学習への向き合い方や学び方に差があるように感じられる。	

<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">学校教育指導の重点、保幼小中一貫教育の諸計画及び各学園の重点等を基盤として</p>	<p>生徒指導</p>	<p>自分と他者を大切に、ふるさととつながる中で、よりよく生きようとする子どもを育てる。</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1 あいさつ・言葉がけを通して、人とのつながりを育む取組を継続する。 2 いじめ防止のため、定期的に「いじめに対する意識調査」を行い、問題の早期発見と対応に努める。 3 個別・集団のアセスメントを通して、子どもたちの心身の状態や関係性を把握し、必要な支援を行う。 4 安心できる居場所づくりとして、学級や学校全体で「心の拠り所となる時間」を確保し、子どもが気軽に相談できる環境を整える。 5 学級での話し合い活動や役割づくりを通して自治的な力を育てる。 	<p>○あいさつや日常の言葉がけを大切にすることで、教職員に安心して関わろうとする児童が増えてきている。</p> <p>○アセスメントにより、児童の人間関係や心身の状態を早期に把握できるようになった。</p> <p>○問題行動を行為のみで捉えるのではなく、その背景にある不安や困り感に目を向ける視点が広がった。</p> <p>○学級での話し合いや役割づくりを通して、自分たちで学級をつくろうとする意識の芽生えが見られる。</p> <p>△不安や困り感を言葉にしにくい児童については、安定した居場所や関わる大人を継続的に保障する体制が十分でない。</p> <p>△生徒指導の捉え方や対応に学年差があり、指導の一貫性に課題が残る。</p> <p>△自治的な活動が教員主導にとどまる場面がある。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学校でのあいさつや声かけを通して、子どもたちが安心して活動できているように感じる。 ・発表会や異年齢活動などで、子どもたちが互いに協力したり支え合ったりする姿が見られる。 ・問題行動だけでなく、その背景にある気持ちにも配慮した指導がなされていることが先生方の様子から伝わってくる。 ・学級での話し合いや役割づくりを通して、自分たちで学級をつくろうとする意識が育ってきていることが分かる。 ・子どもによっては学校の様子を家庭で話さないこともあるため、安心して相談できる居場所が学校で確保されるとよい。
	<p>健康・安全</p>	<p>自分や仲間の命を大切に、進んで安全に配慮して行動する子どもを育てる。</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1 日常生活における「安全な行動」についての定期的なふり返し活動を行う。 2 防災・避難訓練を意味づける取組を進める。 3 児童会・学級活動で「安全に関するルールづくり・見直し」を実施する。 	<p>○日常生活の振り返りを通して、安全な行動を意識しようとする児童が増えてきている。</p> <p>○防災・避難訓練の事前・事後指導により、訓練を自分事として捉える姿が見られるようになった。</p> <p>○学級活動や児童会活動を通して、安全に関するルールを見直そうとする意識が高まった。</p> <p>△振り返りが形式的になり、行動の定着につながっていない場面がある。</p> <p>△安全教育について、年間を通した系統性や学年差への配慮が十分でない。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・防災・避難訓練や学級活動を通して、安全に関する意識が育ってきていることが分かる。 ・児童会や学級活動でルールを見直し様子から、子どもたち自身が安全に関して考える力が育っていることが分かる。 ・日常生活への定着については、さらに工夫されるとより安心である。

<p>特別支援教育</p>	<p>一人一人の特性やつまずきに 応じた支援を通して、自己肯定感 を高め、安心して学び、共に成長 できる学校をつくる。</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1 個別の教育支援計画・指導計画の充実と共有 を行う。 2 ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授 業づくりを進める。 3 通級・特別支援学級との連携と柔軟な学びの 場の確保を行う。 4 特別支援教育コーディネーターを中心とした 校内支援体制の強化を図る。 	<p>○個別の教育支援計画・指導計画を基に、児童の実 態に応じた支援が行われている。</p> <p>○特別支援学級・通級指導教室が、児童にとって安 心できる居場所として定着してきている。</p> <p>○ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づ くりが広がり、見通しをもって学ぶ児童が増えた。</p> <p>○特別支援教育コーディネーターを中心とした校内 連携により、組織的な支援が進みつつある。</p> <p>△支援の継続性や次年度への引継ぎの在り方につい てさらに充実させていく必要がある。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・支援学級が子どもたちにとっ て安心できる居場所として 機能していることが、学校か らの報告や活動を通して分 かる。 ・発表会や異年齢活動で互いに 支え合う姿を見て、子どもた ちが自信をもって活動して いる様子うかがえる。 ・先生によって経験や関わり方 の差はあるあろうが、全体と して子どもを支える体制が 進んでいることが分かる。
<p>情報活用能 力</p>	<p>「子どもたちが ICT を効果的に 活用し、情報を収集・整理・発信 する力を育み、主体的に学び続け ることができる環境を整える。」</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1 デジタルツールを活用した授業づくりの推進 を図る。 2 日常的な教育活動における ICT の自然な活用 の促進を行う。 3 教員の ICT 活用研修を実施する。 	<p>○ICT を活用して、自分の考えや学びの過程を整理・ 表現する姿が増えてきている。</p> <p>○ICT を学習の道具として自然に使おうとする意識 が、児童・教員双方に広がっている。</p> <p>△ICT 活用の方法や頻度に教員間の差がある。</p> <p>△学習のねらいと結び付いた ICT 活用の共有や研修 が十分でない。</p> <p>△情報を正しく判断し、責任をもって扱う力の育成 は継続課題である。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・日常的にタブレットを使って 自分の考えを整理して表現 する姿が見られ、学習の道具 として自然に ICT を使おう とする意識が広がっている ことが伝わってくる。
<p>次年度に向けた改 善の方向性</p>	<p>本年度は、新しい学校教育目標のもと児童の学びと生活を中心に教育活動を進めてきた。授業や異年齢活動、地域との学びを通して、自分の考えを表現したり、他者と関わったりする姿が増え、発表会や異年齢活動でも成長が見られた。特別支援教育や安心できる居場所づくりにより、児童一人一人の不安や困り感にも配慮した指導が広がってきている。今後は、自己調整力の定着や支援の継続性、ICT と書く活動の両立をさらに充実させ、次年度に向けて安心と意欲が持続する教育環境を整えていく。</p>		<ul style="list-style-type: none"> ・タブレットを使う場面が増え る中でも、鉛筆で書くことや 自分で整理して書くことも 引き続き大切にしてほしい。 	